

■学位論文内容要旨

発達障害者支援についての批判的考察

——支援の不確実性に注目して——

菊地 侑真 (2022年度修了)

1. 研究の背景

発達障害者支援法の改正において、「個々の発達障害の特性」という表記が追加された。しかし、そのことは発達障害者をどのようなやり方で、また何を指して支援するのかという問いを明確にしてくれるわけではない。むしろ、個別支援を推し進める発達障害者支援に関する各事業・制度の理念は抽象度が高く、それゆえに各々の抽象的な用語が、様々な個別の解釈によって一人歩きしているようにも感じる。このように、「個別ニーズ」という、支援の一般化を避けた人権保証の観点が重要視された打ち出しの中で、支援者の迷いという問題を含みながらも、用語の多義性・曖昧性ゆえの、聞こえの良い用語の裏に隠れた問題があるのではないかという問題意識から、本論文を執筆することにした。

2. 研究目的と方法及び構成

以上の問題意識から、発達障害者支援の難しさが具体的に何に由来するものであるかを具体的に解明することを目的とする。1章は先行研究としてパートナーリズムの議論に代表するポストモダニズムの視点を整理し、そして続く2章・3章では、「中動態」概念に代表されるポストモダニズム以降の新しい視点に基づき、支援行為の批判的検討を行う際の〈不確実性〉を検討していく。

3. 結果

第1に、「ニーズ」概念そのものが不確実な概念であるということである。また、その不確実性はニーズ概念の理論的な整理が統一されていないという〈曖昧さ〉と、またニーズは社会や当事者や支援者の所属機関の規律に大きく影響され得るという〈規範性〉、主観的ニーズでさえも外部からの刺激を受けて存在しうる〈客観性〉の3つに分類し語ることができる。第2に、発達障害者支援に必要とされる〈専門性〉が不確実だということである。発達障害者支援は〈個別ニーズ〉に沿った支援という打ち出しがあるにも関わらず、「専門的」且つ「適切な支援をしなければならないということである。しかし、障害に関する一般的知識の習得と、個々のケースを積み重ねる実績の兼ね合いであると見て取れるが、そのバランスなども全て〈個別ニーズ〉という言葉に集約されており、その専門性の具体的答えは明確にはされていないということの意味すると言える。第3に、支援をする際に最も考慮すべき価値とも言える〈包摂〉についても、一歩踏み出して考察したときに、実は隠れた規範性を持っていたり、排除の可能性を秘めているという意味で、確実な〈包摂〉に関する不確実性が存在すると言える。発達障害者支援では〈個別性〉を重要視していながらも隠れた規範性や排除性を持ち、また、仮に〈個別ニーズ〉という曖昧な概念を重要視しているのみでは、取りこぼす様々な問題がある、とまとめることができるだろう。

4. 考察

発達障害者支援には、パターンリズムを基盤とする医学モデル的なまなざしが残され、〈ニーズ〉という用語に隠された規範性の問題がある。同時に、その支援行為自体を“過度な包摂への危惧”として批判的に捉えることの重要性もある。

課題としては、解決策として具体的な支援方法の提供

が今の段階では難しいことがあげられる。しかし以下のことに言及しておきたい。元橋はエンパワメント概念の普及の仕方を批判的に論じる中で、「力（パワー）は個人の内面や心理からではなく、関係性、集団の中において得られるものであるという本来のエンパワメントの立場である」と述べているが、このように支援担当者とその他の人や集団などの関係性に働きかける支援の普及が倉石の懸念点を打破する手だての一つになるのではないだろうか。